
彼女は闇を引く

梢田 佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は闇を引く

【Nコード】

N9435G

【作者名】

梢田 佑

【あらすじ】

追う女と、追われる男。傷つける者と傷つけられる者が、互にぶつかり、数奇な運命をつむぎだす。

第1話：連鎖のはじまり

両手からの衝撃が、近づいて遠のき、疲弊の崖はときに際限なく続き、女をすっぽりと飲み込んでしまふ。女は闇へと落ちていく。

硝煙の中に、彼の声を見つけた気がした。終わったと、彼は笑みと、とびきりの言葉をかけてくれる。幻影は、煙と共に掻き消される。

終わったのだ。半ば強制的な暗示だったが、必ず実現してみせる。女は決心する。そのまま、地面に崩れ落ちる。

このまま気を失えばいいと考えた。

1

悩む必要はなく、着替えと食事と、それから化粧を整えれば、羽鳥伊織とりいおりの休日は大体の行動パターンが決まっていた。

最初に、外に出る。気分が良ければ車で、悪ければ車か、男友達を呼び出すかで、足を確保する。それから撃つ。説明すると、大体の人間がパターンに沿った反応をする。それも慣れている。

今日は気分の良い日だった。伊織はシャワーを浴びてから、ジーンズとTシャツに上着をまとい、マンションを出た。

土曜の早朝は、普段と少しいでたちの異なった通行人たちが、大半を占めていた。あるいは部活か、出勤か、楽しそうにはしゃぐ者はきつと、県外にでも遊びに行くのだらう。伊織の外出先はその中

2

でも、ひとときわ特殊と言えた。

キーを回し発進させる。長い道のりとなる。ラジオのボリュームを上げると、八十年代のジャズが車内に流れ込み始めた。

後部座席には相方。目立って無口で、それも、かなりやすごくなどではなく、尋常ではないほどの無口。伊織の相方は人間ではない。それでも伊織は、どんな知人というよりも、彼との時間に魅せられる。

ボリュームを上げた。

だから車に、うるさいラジオは必須なのだ。

国道から外れて、横道に入る。土曜の早朝でも、大型トラックなどは絶えず往来しているからだ。そのまますいた小道を選んで、国道沿いに進んだ。

携帯が鳴った。デフォルトのままの素っ気ない受信音は、ラジオの中でもよく聞こえた。片手をハンドルに添えたまま、左手で助手席を探り、携帯をつかむ。ずいぶんしつこく鳴り続けている。

>発信者 浅倉伸吾あみくほしご<

「黙って」

開口一番に言った。伊織は苛立っていた。

携帯の向こうで、相手はいくらか戸惑っていたようだった。そのままそくさと通話を絶つような人間ではないと、分かっていたから苛立っていた。

「まだ何も言っていない」

遠慮ではなく、憐れみがこもっている。伊織の神経を逆撫でた
いのならば、それは成功している。

「言わないうちに釘を刺したの」

アクセルを踏み込みながら、今相手がどんな表情をしているか、
思い浮かべてみた。上手くいかなかったのは、想像力というよりは、
記憶力の問題だった。浅倉という男は、実際、伊織の恋人であるは
ずだったが、顔すらまともに思い出せない。要は伊織の中で、その
程度の存在なのかもしれない。

「今、どこにいる？」

のんきなものだ。伊織は答える。

「もうすぐで県を出るわ」

「ひとり？」

それには答えない。ひとときの沈黙を、労わりに満ちた声音がか
き消した。

「少し話そう。言いたいことは山ほどあるけど、本当に君を心配し
てる。僕と会つのが嫌っていうなら、電話だってなんだって構わな
い。でも……もう何十日、君は出勤してない？」

「有休よ」バックミラーには、さぞ不機嫌な顔が映っているだろう。

「仕事まで失くす事になっていいのか」

「それが上の判断なら」

言い切って、通話を絶った。浅倉の声が、まだ耳に残っていた。

伊織はアクセルを踏み続けた。ひたすら速く。景色は一秒ともたず、
後方へ流れ去っていく。しばらくすれば、そんなもので声から逃れ
られるはずがないと気付く。

四十日と八日だ。有休だって先日切れた。欠勤を始めて、最初こ

そ旁わりを示してくれた上司も、徐々に愛想をつかしているのは知
っている。

浅倉に言われるまでもない。本当は知っている。パターン通りに
していなければ、自分の変化に気付くようでこわい。一秒経てば、
景色がどんよりと崩壊を始める。気のせいではなく、伊織にとつて
は事実なのだ。だから伊織は、アクセルをゆるめられない。

ラジオが騒いだ。それに紛れて、携帯が鳴った。今度こそは取ら
なかった。

友人が殺されて、もう四十日と八日になる。

第2話：相方

2

飢餓で苦しんだり、灼熱の炎に焼かれたりするのはない、何も無い地獄。今の伊織はそこにいる。闇はいつでも不完全だ。だからこそ苦しい。

伊織は何度も抵抗する。空や草木を眺め、できるだけ時間とどまろうとする。瞬時に、空はへしゃがり草木は溶けて、やさしげな姿を変貌させる。目に見えるものの全てが歪んで見える。

地獄はずっと同じだった。

なかたよしゆき 中田義之が殺された日から、ずっと、伊織の住む闇は変わらない。それが自分の日常で、ここから出るべきではないとさえ思える。

あらゆる苦痛の末に義之は死んだ。遺体は凄惨なもので、箇所箇所骨折と、小さな火傷、痣が大量に確認でき、暴力団員数名が、後に嫌疑にかけられた。

四十日と八日が経った。たった四十日。数字に換算してみたところで、地獄を形容する事などできない。闇を漂い、光が途絶え、数多の思考に飲まれた時間。酷い比喩表現だがこれ以上となく、今の伊織にぴったりでもある。つまりはそれが、「何も無い地獄」の正体であるからだ。

空が流れて、草木が茂る。ずいぶんへんぴな場所にきた。セブンスターの箱を探り、煙草をくわえる。ひらけた場所で風も強いいため、

煙などはひとたまりなく、空に巻き上げられていく。もう一度、煙草を吸い込んだ。ニコチンに体内が満たされるのを感じた。

ウインカーを出すのを忘れた。

ハンドルを切る。幸い、対向車は無かった。あるいは、無いことを知っていたから、ウインカーを出し忘れたのかもしれない。

木造で古ぼけた建物の、決して広いとはいえない駐車場に車を停めた。エンジン音が静寂に変わる。その代わり、窓の向こうから聞こえてくる騒音が、少しだけ伊織を安堵させた。この地点からようやく、伊織の休日は始まるのだ。

車を出た。

騒音が近くなった。

伊織は、古ぼけた建物の玄関をくぐった。受付の男と目が合った。寡黙な男だ。なにか言われる前に、銃の所持許可証を提示した。この男とは顔馴染みだったが、形式というものがある。伊織はそれから、用意されたメモに形式どおりの情報を記入し、形式どおりに提出した。

それと引き換えに、射票（スコアカードのようなもの）を貰い、男が指示をする。これには耳を傾ける。指示を受けて、建物を出る。やはり男は寡黙だった。よろこばしい事だ。いま必要なのは、銃の声。ほんとうにそれだけ。

これが伊織の休日だ。

大学の部で射撃に魅了されて以来、十年以上続けている。伊織のパターン。

いったん車に戻ると、後部座席のドアを開けた。例の相方が、急

いたまなざしを向けてくる。ただの気のせいだ。相方はけっして喋らない。笑わないし、怒らない。思考はない。そのかわり、伊織を安らがせる才能については一級と言える。

相方が苦笑して、はやくここから出してくれ、とばかりに、伊織を見つめる。もちろん、それも気のせい。

伊織は手を伸ばして彼を掴んだ。真実など重要ではない。麻薬のようにゆるい刺激が、伊織の中をまわり始める。そうそう、それでいいんだよ。はやくはやく。車の外に出されると、ケースに入れられた相方ははしゃぎはじめる。

伊織はいったん、それを地面に置くと、射撃ベストを着用し、装弾ケースと、ガンケース　相方　をそれぞれ、左右の手で持ち上げた。けっこうな重さで、それが予期できない人間はたぶんよめく。伊織の足腰はしっかりしている。

射撃というのは、日本という国ではことさら、やばんな競技と思われがちだが、真相はすこしばかりちがう。こんなに平和な「戦」もないのだ。

動く標的をねらうクレール射撃、その中でのトラップという種目は、基本的には数人が同じ射面（トラップ射撃を行う射撃スペース）に集まり、最終的なスコアを競うルールだが、それはほとんどがプロ仕様で、趣味の射撃はそこまでできすぎしていない。射票に付けられたスコアは、なんとなしに見せあうか、自分の向上を図るためか、射撃検定のために保存しておくプレイヤーもいる。対戦にはならず、だから要は、悠々とすごせるのだ。ここではまだ。

銃声がした。左手の射面で、ひとりの男は満足気に、銃をおろし

た。期待と興奮に顔がゆるむ。銃はいつでも、心をべつに作りかえる。べつの色に。

プーラーハウスが見えた。丸めがねで、常になにかを観察しているような、プーラーと呼ばれる係員の基地だ。プーラーはスコアを記入し、射手を把握し、監視する。それが仕事だ。しかし、この男に限っていえば、こんなに楽な業務もないと思う。ひとを見るのが趣味なのだから。まちがいなく。

伊織は彼に、射票を提出した。彼はなにも言わなかったが、こちらをちらりと一瞥する。無言の間に、お互い敬意を示しあう。彼はスコアの記入に戻った。伊織だけではない。プレイヤーはごまんといるのだ。そこだけ彼を気の毒に思った。

射手控え室にむかった。プーラーハウスから十歩ほど離れていた。他と比べて広いほうで、ほったて小屋みたいな印象だが、テーブルだつてちゃんとある。

既に三人の先客がいた。彼らはみな三十代から四十代の男性で、伊織を見るなり頭をさげる。平和な戦。だれも敵意なんかにさらされたくはない。

伊織は椅子に座り、荷物をおろすとまず、ガンケースを開けた。

やっと解放されたよ、とここでいま、おれの身体はどうなってるんだ？

真つ二つの相方は、その状態に気付くなり、ぶつぶつと文句をいう。ように思えた。ショットガン、口径は十二番で、上下二連式。極めて凡庸だけれど破壊的。指先が銃身にふれると、伊織の望んでいたことが起きる。心を作りかえられる。

浅倉の声が聞こえた気がした。耳の保護に、イヤーマフを付ける。

周囲の雑音と共に、幻聴すらも消える。

なにも聞こえない。

それでいい。

難点があるとすると、ひとつ、これは、銃声すらも聞こえなくなるのだ。

「なんであんなのと付き合ってるんですか？」

あんなのがない間を見計らったことだった。そのときの伊織にとつて最良の話題だった。

単刀直入に聞いた。

思えばずいぶん無作法だったと思う。それ以後、彼が大きな存在になるなど、夢にも思わなかった頃の話だ。もしも未来を見通せたら、あんな失礼な問いかけはしなかつただろうが、いまの伊織と、義之にとつては、必要な問いかけでもあった。

義之を見た人間のすべてが、義之を冷静でユーモアのない男と思うように、義之が笑うことはめつたになかった。だから伊織は、そのときも、彼が気を悪くしたのだと思った。眉根を寄せて、いかつい顔をする義之を見て。

「羽鳥さんだっけ」

高くもなければ低くもない。ゆったりした話し方で、焦れる訳でもないが、なんとなく続きが聞きたくなる。義之は無口なほうで、

話し下手でもあったが、昔から、心地のいい声をしていた。

「君がそう……あんなのと思うんだったら、まず同じ言葉を返したい。なんであんなのと付き合ってるんだ？」

それが、挨拶以外にはじめて、ふたりが交わした会話だった。彼の友人と、友人の彼女。とてつもなく微妙な距離。でも伊織たちは、それ以前にも、互いの根っこを嗅ぎ取っていた。頭は悪くない。顔も。性格はちょっと悪いかも。

(でも、ばかじゃない)

そんなふうに。会話してはじめて、直感が確信へ切り替わったにすぎない。

あんなのはすぐに場に戻ってきた。「あんなの」はそれなりに嫉妬深く、だから伊織は、そのときはそれ以上話せずに、以後も、微妙な距離はしばらく続いた。でも今度こそは確信をもって、伊織は嗅ぎ取っていた。おそらく義之も、お互いはお互いにとって、奇妙に符合することをだ。

伊織はそのとき積極的ではなかった。頭は悪くない。顔も。ただ「あんなの」の顔はもつと良かった。

性格は最悪だけど、義之とちがって感情のくすぐり方を心得ている。

「あんなの」は若いころにありがちな失敗を繰り返していた。彼は常に、優れたものしか愛せなかった。そして己の無知に鈍感だった。彼は伊織を知らなかったが、知らないことを自覚し、知ることと愛そうとはしなかった。彼は面倒を嫌った。いま思い返せば、しようがなかったと思える。若いというのはそういうことだ。

そして伊織は、知らないことを押し通して、「あんなの」が自分の理想と思い込んだ。彼は、本質は最悪でも、伊織や他のひとたちを上手く言ばせた。だから、悪い部分については考えないことにした。いま考えてのことではないが、受け入れることと、見過ごすこととはちがう。悪い部分を直視すれば、彼のすべてを愛せるとはいえなかった。

ばかな恋愛をしばらく続けた。消耗し続ける日々をずっと。断ち切るきっかけは義之だった。その後のことを考えると、結局、ばかな失敗は続いていたが。

あんなのは煙草の匂いが好きだった。

浅倉は伊織の喫煙に関して、快く思っていない。

どっちのほうがましだろう？

第3話：ばかな選択

鮮やかな爆発を見た。

伊織は衝撃を感じた。遠方で、標的が宙に碎け散る。

銃弾を確認すると、四十八発減っていた。元々が五十発だから、いまは二発。だが、周囲のプレイヤーの様子から、気付いた。1ラウンド終了したのだ。

伊織は再びプレイヤーハウスに向かう。丸めがねから、彼は、伊織を覗きこみ、無言で射票をつき返して来た。それからまた、せかせかと、スコアの記入に戻る。返された射票にも、いつさいの漏れなくスコアが書き込まれている。

自分がどんなプレイをしたか、まったく覚えていなかった。スコアを見ても思い出せない。いつも通り、点数は上々だが、弾の消費が気に入らない。1ラウンドで最低必要なのは、二十五発。最大で五十発。少ない弾数で標的を撃ち落とせたほうが高ランクだが、今回の伊織は、下から数えたほうがはやい。

車へ戻った。

イヤーマフを外す。喧騒が聞き取れたとき、少し緊張する。乱れた髪を撫で付けて、二つのケースを車へ押し込む。相方はじっとしている。彼の役目は終わった。

伊織は古びた建物へ入った。

射票を見せて、料金の支払いを済ませる。

受付の男は相変わらず無口だった。

義之は無口だった。

しかもいつも、肝心な部分で無口になる。最初はそれが、照れや戸惑いなどという、いたって人間らしい理由からきているとは思わずに、きまって斜に捉えた。

こういうことだ。(わかった、私と話したくないのね)。
しばらくするとこう感じた。(ああ、そうか。私を焦らしてる?)

もつと単純に、巧妙な話術などと捉えずに、彼のありがちな弱点と気が付いた日には、長い年月が経っていた。

義之の声が思い出される。あんなのと別れた、そのすぐ後にかけた、電話の向こうの声だった。遠く、もやにかかって聞こえる。

「なんて言ったらいいの？」

義之は歯切れが悪かった。

あるとき、受話器を握りしめたとき、右手に滲んだ汗の感触を、いまでも忘れない。

「言わないでいいわ」

「俺と話すべきじゃない」

「わかってるけど わかった。ごめん。でも、すこし言わせて」

ちようど夜中の九時だった。伊織はベッドに寝転がり、当時住んでいたアパートの、薄汚れた壁を見上げる。

電話機のコードを指にからめる。

「なんであんなのと付き合ってるんですか？」

当然、彼の顔は見えなかった。

だが見当はついていた。今頃、いつものように、きつといかつい顔をしている。眉根を寄せて、伊織の言葉を反芻しているにちがいない。

義之お得意の「沈黙」がうまれた。そのまま通話を絶つてもよかった。右手の汗が、伊織の感情そのものだった。

しばらく経った。

ゆったりしたテンポで、声は言った。

「俺にとっては、あんなのじゃない」

それからまた、沈黙。

ため息ともつかない呼吸が聞こえる。

「でも君が好きだ」

見透かされた気がした。

伊織は選択をせまった。友人か伊織か、どちらかをとる選択を。義之はあまり利口ではなかった。覚悟を決めなかった。どちらも捨てなかったのだ。

それは彼の弱点だった。

けれど、一般に、恋人と呼ばれる仲にふたりはなった。

誕生日にプレゼントを用意し、クリスマスの夜を共にすごし、お互いがお互いを一番にし続ける関係に。それはそんなに難しいことではなかった。自分の価値を保証されているぶん、相手に対してやきもきする必要もなかった。

時には評判のレストランに入って、値段の高さに辟易し、時にはバイクであてもなく走り、沈んでいく夕日を眺めて風を感じた。

彼は伊織の冷たく、残酷で、不公平なところにも、やがて気付く。それでも、完璧でなくなった伊織を変わず受け入れてくれた。伊織も彼を知り、弱点と人間味に触れ、触れる前よりもずっと、彼を愛しく思った。

二年のあいだ続いた。

別れはあつけなかった。ここでも伊織はばかだった。

自分の歳を考える。二十三。それから、安定した未来に不安を覚える。おだやかな関係に納得するのは、まだ当時は若すぎている。何度も覚悟を決めた。安定した未来にむかう覚悟だ。

だが、結局、ふたりは別れた。友人という形には戻れた。ふたりにとって、互いは異性である前に、そのひと自身であったからだ。

義之は言った。

「君は賢くない」

知能ではなく、精神のことを指している。義之は、伊織の冷たく無慈悲で、身勝手なところも知っていたから、すべてを察して、そう言った。返せる言葉は何もなく、伊織はただ、二年という歳月について考えていた。二年という歳月がもたらした、義之との関係だ。それらを踏んでも向かいたかったのは、行く先が楽園ではなく、生々しい痛みに満ち、興奮と情熱にあふれていて、当時はそれぞれ生きる動力と生きていたからだ。

伊織もようやく、今年で三十になる。

すこしは賢くなったのに、義之はいない。

第4話：白井仁

景色が溶ける。

崩れて、形をなくす。伊織はそれを見ている　なんらかの衝動をこらえながら。気をゆるませた瞬間、決定的に、自分のパターンを失う気がする。

ハンドルを握りしめた。ここが車内であることに気付く。伊織は汗をぬぐい、エンジンをかけ、その音を聞いた。現実がゆったりと流れ込んできた。

車を前進させる。射撃場を出て、田舎道に戻る。いつもどおり、対向車などはいない、アスファルトはいつもどおり、乾いた色を持っている。いつもどおり、いつものように。気付けば自分が、自分から、すべての思考をはじめ出している。

ラジオ。流行りの歌が流れている。

道路。だれもない、すいている。

草木。ミラー。看板、えんとつ。様々な色の往来とともに、伊織の思考が消滅していくのを感じる。

ラジオ。道路。草木。ミラー。看板、えんとつ、ラジオ、道路……。

線香の香りがした。ブレーキを踏む。潰れたコンビニの駐車場に、歪な形で突っ込んだ。車体が大きく揺れるのを感じた。そのまま、永遠の時間を、傾きの中ですごした気がする。

身体中が栗立った。そんな自分に気付くのもいやだった。線香の香りがする。義之が言う、君は賢くない、君は知らない。精神ではなく、知能のことを指している。実際、伊織は何も知らないのだから。

ハンドルを叩き付けた。
苛々した。
自分に。

だから、気の毒というしかない、その瞬間に限っては、浅倉がいかなる努力をしようと、電話をかけた時点で、伊織の不機嫌は決まっていたのだ。

「もしもし」

一応そう言う。声の暗さがひどい。

携帯をしっかりと握って、呼吸をしながら、さらに続ける。

「何か用？」

浅倉という男は沈黙に弱い。

「渡したい物がある。返しそびれた本だよ。できたら早く見てもらいたい」

「ポストに入れておいて」

彼は一瞬躊躇する。

「メモが挟まってる」

それだけ伝えて、さもつまらなそうに、取り繕い、彼らしい方向に話を動かす。咳払いのあと、こう言うのだ。「君んちのポストはバカみたいに小さいだろ」

事実だが事実ではない。伊織の居住するマンションは、たしかにバカみたいに小さなポストだが、浅倉はそんなことを伝えたいのではない。歪なやさしさを感じ取れる。だが伊織は、ほほ笑みを浮かべたりはしない。ひとつに苛立ちと、それから、実際はこちらの理由が大きかったが、話に気をとられていたせいだ。

「メモ？」

呟いてから、そんな自分に首をふる。義之の顔が思い出される。浅倉はきつと同じように、大体の見当はついているのだろう。だが

ら伊織に電話をよこした。勘がよくて実直なのに、どことなく間抜けな彼らしい。

「いまから帰るわ……三時半にカフェで会える？」

シートに深く寄りかかる。外の景色が見える。いまは溶けていない。

3

臼井仁うすいひとしが嫌うものは、ぜんぶで三つある。

無知と無力と浅はかさだ。

高校のころ、家族のいない彼は、クラスメートたちのうさばらしに選ばれ、殴られ、蹴られて、そんな日々をすごし、それがどうとは思わなくなってきたが、彼を突き動かしたのは、常に、無知と無力と浅はかさだった。

周囲に馴染まない仁を担当は、「協調性がない」と言い切った。それはそのとおりであるが、いかにも善人で、頭が悪く、お人良しな担任教師は、仁にとって許されざるべきものを持っていた。無知と無力と浅はかさ。

「良いクラスよ。あなたもきつと、もつと周りに心を開けば、あなたにとってむずかしい事かもしれないけれど……そうすれば、みんな仲良くしてくれるわ」

愚鈍な表情。晴れやかで、なにも憎まず、世界の半分も知らない人間の顔だ。

虫唾がはしった。ものすく。

仁はまず、クラスメートの男の腕を踏み潰して、彼女の世界を壊してやった。まともな人種は、だれも仁に近寄らないほど、何度も何度も殴り続けた。応酬は大きく、それこそ、殺されると思ったことは一度や二度ではない。

注意がきたのは仁のほうだった。

暴力はいけないこと。何事も話し合うこと。互いを認め合うこと。仁は注意を聞き流す。見方を誤ったおろかな発言だった。常に、教師というものは、悪の存在を認めたらならない。

「悪い人間なんていない」

担任は、諭すような口調で、仁の目を真っ直ぐに見据えて言う。

聞き飽きたような説教だ。

「あなたにとって、彼らがそう見えるのは、そういう見方しかできないからよ」

彼女は間違っていた。

世の中には、絶対的な悪がある。そしてそれを知らないこともまた悪だ。

第5話：景色の先

4

休日の喫茶店には、二人組の女性客がはびこっていて、煙草を吸う中年男性などまねだつた。さらに少数派で、二十代後半の男の一人客というのがある。だから伊織はすぐに見つけられた、空間から浮いたような彼だからだ。

「ごめんなさい。遅れて」

久しぶりの対面で、そんなことを言うべきでないのは分かっている。だけど伊織に、それ以外の言葉は思いつかない。

アイスレモンティーを注文したあと、浅倉をあらためて見つめた。はたしてこんな顔だつたかと思う。というのも、とにかく覚えがない。平凡で、特徴がなく、見るひとによってはよくも悪くも思える顔立ちだつた。

浅倉がこちらを見返してくる。思わず顔をそらす。

「やせたな」

浅倉が言う。久しぶりの対面で、そんなことは言うべきではないのに、浅倉の声には確信がこもっている。

「本は」

短く言う。それ以外の言葉は思いつかない。

浅倉は一冊の本をテーブルに置いた。懐かしさも湧かないような古い本だつた。伊織はそれを手にとつた。ページを捲る。浅倉が立ち上がり、椅子の音が鳴つた。

「ごめん」

なんの事だろうと思ひ、彼を見上げる。彼は言葉を思索して、一瞬の躊躇を見せる。

「でも、はやく君に返すべきだと思った」

テーブルに千円札が二枚おかれる。

伊織がなにか言う前に、浅倉は口を開いた。

「僕はもう行くから。ゆっくり見るといい」

ここに来て、五分も経っていない。伊織は呼び止めようと思う。

だが、どんな言葉で、どんなふうに言えばいいのか、なんにしたら、伊織が言えば、虫が良すぎるように聞こえる。

浅倉が踵を返しかける。

「ちよつと」

思わず言った。

「待つて。お願い。ひとりになりたくないのよ」

言葉はやはり虫が良すぎた。浅倉は動きを止めて、首だけちよつと振り返ったあと、確かめるようにぎこちなく、ゆっくりと伊織に向き直る。

目が合つて、訴えかける。言葉はないが、曖昧な感情をうつすのに、目はよく似合っている。浅倉が、自らを宥めるようなため息をつく。

「しばらく会わなかった」

「ええ」

言葉の真意が汲み取れず、伊織はただ、浅倉の瞳を見つめる。

「それが君にとって、最善の策だった……昔の君にとって。いまは？」

それには、ちよつと考える。浅倉は辛抱強く待つている。

ラジオ。道路。草木。ミラー。看板、えんとつ、ラジオ、道路、

溶けた景色と、苛立ちに叩き付けたハンドルの感触、それから、シヨットガン。何度、銃での粉砕しても、心のべつの部分はそのまま 暗い色のまま。そして伊織は、またあの射撃場へ足を運ぶだろう。

伊織は首を振った。

「分からない」

それが正直な気持ちだった。

「でも、このままじゃだめって思う」

浅倉はもう一度、深く息を吐いた。おだやかな表情を浮かべている。それから、軽くうなずいた後、再び椅子に腰掛ける。話していると言っている。

今度こそは、うまくまとめられるよう、何度も言葉をイメージする。自分の心と向き合うように、丁寧に思い浮かべる。伊織は、浅倉の目を見据えた。

「数十日間、ずっと考えてた」ここですこし躊躇う。でも、言わなければ先へ進めないから、伊織は言う。「義之がなぜ死んだか」

浅倉は何も言わない。だから、伊織は、「なぜ」の意味について考える。なぜ死んだか そのまま捉えようとすると、答えは頭部の損傷。頭蓋骨が叩き割られていたから。さらに裏読みするなら、じっさいはこちらの答えが正しいが、なぜ頭蓋骨が叩き割られる事態になったか、だ。なぜそんなことをされなければならなかったか？

「女性関係でトラブルが生じたと言うけど、信じられない。やくざが困うような女性に、義之が近づけたことが」

「誠実なひとだったんだな」

「少なくとも真面目だったわ」

レモンティーを啜る。冷たい感覚に、舌が刺激される。

「八代って男を知ってる？」
「ああ」

義之の殺害には、後に数名の暴力団員が挙げられた。八代寛之はやしろうゆきそのひとりだった。ほかの、どこぞのチンピラのような団員とは違って、彼だけは風格と知性があった。そして彼は、三十日間の拘留のなか、物的証拠が見つからず、ただひとり起訴を免れた。

「伊織」

名前を呼ばれる。顔を上げると、強い憐憫のまなざしに射抜かれる。

「悲しむだけ悲しめばいい。そうする権利が君にはある。でも忘れちゃならない　中田さんをああさせた連中は、もうみんな捕まってるんだ」

本気で言っているのだろうか。浅倉の目に、ごまかすような揺らぎはひとつも無い。伊織の中で、反発的な心が芽生える。

「八代は？」

「警察が総動員しても、髪の毛一本見つからなかった。あいつは関係ないよ」

「そんなの間違ってるわ」

声を荒げそうになる。行動に移さなかったのは、浅倉が、なぜか悲しみを浮かべたからだだった。「なぜ」？　その意味について考える。考えるまでもない。自分のせいだ。

「時間が必要みたい」
「いまもまだ。」

でも、このままではだめなのだ。

「長いあいだ、あなたと会おうとしなかったこと、本当にごめんなさい。でも混乱してるのよ。明日になると、また、あなたからの電話をとらないかもしれない」

「分かってる」

浅倉はおだやかに言う。

「そんなことは大した問題じゃない」

確信がこもっているが、浅倉の声は、ある種の諦めに満ちていた。

第6話：卑怯な男

5

中学にあがるかあがらないか、ぼけた子供だったころ、母親とよばれるひとが自殺したことについて、臼井仁は、だれかれ構わず話すことにしていた。

母親が自殺した。しかも目の前で。疲労が溜まったらしい。それから親戚に引きとられた、父親は顔も知らない。これでたいがいの女性は食いつく。同情して、妙な義務感をはたらかせる。母の死が禁句だったのは、せいぜいが高校まで。それも二年で中退し、以後はずっと、現在まで、精神面での変化はない。

仁は考える。自分が卑怯で、最低でも、それを知っているかどうかでは、大きく意味合いが違うこと。自分が卑怯で、最低なことを、仁は言い訳しないことにした。諦めではない、素直さとも違う、ただ事実が事実で、それ以上の意味合いをもたないことを、仁は知っていた。

毎朝起きて、鏡を見る。自分の変化に気付く。だいたいはそのを認めて、直そうとはしない。同じことの繰り返し。数年前、社会人に成り立てのころより、すこし痩せた気がする。指に絡まるくらいは長髪で、二重で、くっきりした輪郭、顔立ちはいい。たぶん、かなり。

顔を洗う。受動的な生き方だ。それはどういうことでもなくて、ただ、間違いなく事実だった。

仁が洗面所から出ると、大森美希は、ホラービデオに熱中している

て、仁が声をかけたことで初めて、こちらに気付いたようだった。

「おはよう。コーヒーあるわよ」

美希は言う。すっぴんでも、如才のなさは変わらない。笑った唇から、白い歯の整列がうかがえる。そうやって、愛想をふりまくところこそ、彼女のビジネスだった。

「それより腹が減ったな」

ぼやきつつ、冷蔵庫の中を開けたのは、いつかのサンドウィッチを思い出したからだ。ぱさばさで、干からびていて、その見た目以上に、最低な味のサンドウィッチ……。コーヒーとの相性は、悪い意味ですばらしい。仁がそれを食べる理由は、自炊をすれば、さらにすばらしいことになりかねないからだ。

「出掛けなくていいの」

なんとか押し込み、食べ終えて、仁がソファーに座ったところで、美希は言った。口内にサンドウィッチの味が染み付いている。仁は一、二回、咳払いをしてから、美希の横顔に目をやった。

「どっちでもいいんだよ。今日は」

「明日は？」

美希のいたずらっぽい笑み。彼女の腰に手を回し、そのしなやかさを味わわぬまま、ゆっくりと距離をつめる。彼女の呼吸が感じとれるまで。

「さあな……いいだろ、最近顔すら見なかったんだ……ビデオを消しても？」

「いいわ」

さらに腰を引き寄せると、彼女が言葉どおり、なんの抵抗もしないことに気付く。腰を引き寄せ、それこそ鼓動が感じられるほど、ギリギリいっぱい詰める。仁は手を上のほうへ這わせようとす。

「ビデオは」

手を離す。美希があっさりと言い放っている。鼓動が一気に遠のいた感じがする。

仁は微笑む。投げやりに。

「そうだな」

立ち上がり、ビデオ、すなわち了承をとれたほうすら放り出して、大きく伸びをする。マンションの七階に差し込む日光は、朝の訪れを告げている。さて、これからなにをするか。

液晶の中では、強面のエイリアンが、ショットガンかなにかで連射され続けている。十数か所穴があいたところで、エイリアンが崩れ落ちる。ヒロインが言う。「終わったわ」その顔は清々しく、勝利の光に満ちている。負傷した男は立ち上がり、傷口を押さえながらも、ふたりはキスをする。次はスタッフロール？

「いいシナリオだ」皮肉のつもりだが、美希には通じなかったらしい。

「正義が勝つってサイコー」

それならこのビデオはサイコーじゃない。これは、スタッフロールのあと、生き残ったエイリアンが、最後の最後にヒロインの前に現れるのだ。それから、悲鳴とともに暗転。

仁はソファアールから離れる。

案の定、ホラービデオの絶叫が聞こえる。笑っているのは、ビデオではなく美希。心底どうかしている。彼女は社交とルックスにかけて、一寸の狂いもないが、ホラービデオで笑いだすことと、仁以上に料理ができないことについては、半ば狂気を通り越している。ここ三ヶ月、仁は彼女をキッチンに立たせたことはない。

「あなたって、なんの仕事してるの？」

リキュールのゆらめきを思い出す。美希は実直な女で、答えが分かっている、疑問はすぐに口に出す。仁はそのとき気分が良かった。

た。

「ひとを騙してる」

じっさいには言葉ほどには、華麗な仕事ではない。狭い部屋に閉じこもり、携帯電話をもち続け、大量のハズレくじのあとで、ひとりの有望客を見つける。時間と精神をそぎ落とす仕事。美希はぱっと目を輝かせた。

「へえ、それってカツコイイ！」

彼女は心底いかれている。

第7話：川添組

6

カフェを出たのは既に、四時をまわったところで、伊織は、浅倉と別れたあと、車に乗り込んでから、主な出来事について考えた。

シートに身体を沈ませて、目と目の間を指で揉み込む。それだけで、数時間分の疲労が浮き出てくる。いまの私に必要なのは、いまは…… たつぷりの睡眠と、糖分のかたまり。あらわになった疲労は、そうして流そう。

伊織は、自分に必要なものを確認すると、主な出来事について考えた。

- ・本をもらった。

- ・浅倉は私を心配している。

浅倉と会ったのはいい薬だった。このままではだめなのだ。このままでは。あんなのは間違っている。伊織は頭の中でぼやき、車を出した。再び、要点を整理する。

- ・私は納得していない。

- ・義之の死について。

いままで、掴めなかった自身の感情が、一気に収束するのを感じる。「なぜ」か。だってこんなのはおかしすぎる。時間がほしい。時間が要る。いまはまだ。

- ・必要事項／パフエと、ベッドと、時間。

近くのコンビ二に立ち寄り、小さなパックにスポンジだのプリンだのアイスだのが詰め込まれたパフェを引つつかむと、ついでに煙草も一ケース購入した。セブンスターに比べると、すこしニコチンが抑えられている。だからといって無害にはならないが、浅倉を思い浮かべて、言い訳がましくつぶやいた。（あなたの言論はごもつともだけど、私はこれで我慢したつもりよ）

マンションに帰れば、今朝と同じく、普段といでたちの違う通行人が目を引いた。車を降りて、鍵のかかる音を聞き、伊織はエントランスホールへと向かった。

古い分譲マンションで、オートロック等の設備はそなわっておらず、代わりに管理人室が設けられているが、それも、カーテンで閉め切られ、伊織が三年前に越してから、活用される気配はない。警備の手薄さには、毎度肝が冷やされる。義之のことがあってから特に、伊織は背後を気にするようになった。

エレベーターを呼び出した。現在六階……唐突に、ポストの確認を思い立つ。羽鳥伊織のプレート。エレベーターから離れ、隣接するポストに屈み込んだ。やはりばかみたいに小さかったのですこし笑った。

背筋がぞくりとした。

不鮮明でいて、確実な感覚。こういうことはよくあるけれど、靴音がしたのは決定的だ。背後にだれかいる。伊織はポストに屈み込み、そのまま身動きがとれなくなる。

「伊織ちゃん」

まもなく聞こえた人のよさそうな声に、ほっと全身の力が抜けていった。（なにをびくびくしてるのよ、ばかみたい）

「寺本さん」

伊織は振り返り、その目で彼女を再確認する。隣室に住む老婦人だ。週末のショッピングにでも出掛けていたのだろうが、ありがたいことに、彼女は人が良い。エレベーターが到着した旨を告げると、さらに伊織を先導しようとする。

「いえ。いいんです。私は」

脱力感が抜けきらない。伊織は、ふしぎそうな老婦人を尻目に、ポストの確認に忙しいふりをする。

結局、二分ほど経ってから、自宅がある四階まで階段で上がった。とうに到着しているであろう隣人の耳を危ぶむように、ゆっくりと開錠する。伊織の休日の、本当のおしまい。（こんなんじゃないめ。すっかりしなくちゃ）自分に喝を入れる。その声も弱々しい。ワンルームの室内に転がり込む。疲れている。ベッドにしがみつくと、とにかく、食器の用意にとりかかる。

スプーンで口に放り込む。パフェの甘さを実感したあと、あらためてベッドに座り直した。眠気とも疲労ともつかないものが意識をよじめる。

浅倉から受け取った新書をややあつて思い出した。国内の法廷サスペンスで、弁護人の女性が事件の真相に迫る。ありがちな話だ。だからなつかしさも湧かないのだろう。

裏表紙のあらすじに目を通し、それから本を机上に置いた。これ以上進みたくない。明日でいい、今日である必要はない。片手が煙草を探り始める。義之を思い出す。

メモの書き込みは、ふたりの間でのちょっとした遊びだった。本に挟むからには、一応その話題だが、脱線することもしばしば。酷いときになると、料理のレシピを書き留めたりした。

借りっぱなしの本をそのまま返すのもなんなので、簡単なメッセーヂと感想を添えて義之に渡したのがきっかけだった。お互い職務に忙殺されかかっていたころだ。義之が同様になにか書いてくれるというのは無かったが、それでも一応読んでくれていたようなので、暇があればそうしてメッセーヂを挟んでいた。いま考えると、脳に蛆が湧いたとしか思えない文章もあった気がする。

当然だが、メモの大半を義之が所有し、彼の死後は遺族に引き取られた（気付かれずに本ごと図書館に寄贈されたかもしれない）。浅倉から受け取った本は特例だ。やはり義之の所有物には違いないだろうが、彼も一度だけ、メモを返還してくれた事があった。あらたに言葉を書き加えて。

なにを書いてくれただろう？ 思い出せないから、こんなチャンスは二度とない。そんな気がした。再生しつくされた思い出ではなく、一、二回程度しかひらかれていない義之との思い出。

伊織は煙を吸い込む　肺のあたりがびりびりして気持ちが悪い。ベッドに寝転がった。多少は楽になった。

次の日、日曜のまだ午前六時にもなっていないころ、伊織はサイレンの音に目を覚ました。

開け放たれたカーテンから、窓の向こうを覗いた。救急車のサイレンだった。胃が締め付けられ、ごまかすように食べ残しのパフェを嚥下した。サイレンは遠のくが、胃痛は治まりそうになかった。

部屋の電気を点けると、予定しなかったことに意識が動いた。八

代寛之について調べる気になったのだ。パソコンの電源を入れ、インターネットを起動した。検索窓にカーソルを合わせる。八代寛之 いったい澱みなく漢字を打ち込めた自分に苦笑した。予定しなかったこと？ これでよく言う。

検索結果は主にニュースサイトだった。八代寛之……川添組の構成員、当時四十七歳。四年前の記事なので、いまは五十一になるのだろう。民間企業への恐喝罪で半年刑務所に入れられている。

調査の対象を暴力団そのものに移してみた。

かわぞえ
川添組

都内に総本部を設け、多数の構成員をしたがえる指定広域暴力団。利益追求にせわしなく、縄張り意識が強い。近年の表面的平和解決として組ごと併呑するといったことを、平成初頭から繰り返ししており、徐々に力をつけていった。

拳より頭、抗争より折衝。背後に武力をちらつかせ、弱小団体を狙った確実な戦略なのだろうが、みみっちいやり口だと思った。伊織はいくつかのページにざっと目を通し、役に立つ情報をメモした。

第8話：赤いプレゼント

7

仁はそれをメモしなかった。この空間において、必要以上に生真面目なやり方は好まれない。なにより、脳のしわに刻み付けることが重要視される。

だからこそ仁は思った。冗長で意味のない説明だ。まだ新米なのだろうが、そう思ってから、ふいに奇妙な感覚にとらわれる。新米？ どっちが？

目の前の男は偉ぶって、あたかもオフィス内随一の実力者であるように拳を振り上げた。たいそうな演説だ。場の盛り下がりにも気付き、付いちゃいない。

ここにくる男たちはふたつ、金の成る木をけっして見逃さないビジネスマンと、虚勢だけで生きてきたチンピラとに分けられる。目の前の男……高田は後者だ。

両者のタイプは同様に、仁のような「非正規職員」を舐めくさっている。だからこちらが新米のように振舞わなければ、相手は納得しない。そして残念な事にこのオフィスに回された時点で、目の前の男は能無しと決まっている。

オフィスに掛かった時計を見やる。午前十時。そろそろ始め時であることは、高田以外の全員が分かっている。

我々はおもむろに作業を始めた。一人一台、ダンボールの中の携帯電話を取っていく。高田が言葉を止めた。彼も金は大事なのだと分かる。当然の話だった。川添組は集金にやっきになっている。高

田のような末端構成員からも搾取し尽くすつもりだろう。

正規なんてろくなもんじゃない、仁は高田を尻目にそうぼやいた。組のために毎月高額を支払っても、金が切れれば縁の切れ目だ。組が望むのはハイテクな集金マシンであって技術、人格云々ではない。

その点非正規は気楽なものだ。非正規構成員は都合がいい。技量にもよるが組のお膳立てした舞台で電話を掛け続けさえすれば、毎月四、五十万はかたいのだから。仁の稼ぎは既に八十万を越えている。

金融機関をよそおい金利の全額を負担すると言い、時には（あながち嘘でもないのだが）暴力団員を名乗り恐喝して、債務者に金を振り込ませる。

けちな商売である。けっして格好良くはない。それでも仁は受動的で、仕事自体の割も良かったため、やめようとは思わなかった。十代のころ麻薬密売から成り上がり、川添組の非正規構成員となっていたままで、仁が警察の世話になったことは一度もない。安心して安全。これ以上文句をつけるのはやばというものだろう。なにより散財の刹那的快樂が忘れられない。

債務者の相手が応答する。その声は怯えて罪悪感に潰されている。携帯を持ち替えて、仁は相手に利子の七十パーセント控除を提案する。

何年もやっていることでそれがどうかは思わなくなったが、それ以上に、債務者がこちらに礼を言うことで、ふしぎと善意を施したような気分になる。

「今日中の振込みなら、それだけ控除してくださるんですね？」

わかりました。ありがとございます」

じっさい仁が相手にやったことと言えば、貸しもしない大金を架空名義の口座に振り込ませたくらいだ。

色とりどりのケーキが並び、カットされていく。仁はそれを、待ちきれない思いで眺めている。母は微笑み、ナイフを滑り込ませていく……ケーキから赤いものが……仁は母に駆け寄る。ケーキが飛び散り、ロウソクがゆらめく。部屋が業火につつまれる。赤色、赤色、赤色。やがて色彩は消え、仁はひどく場違いな自分に気付く。無色……無色。ケーキをカットしたのはだれだったろう？ 知らない男が立っている。男はノックする。プレゼントにケーキと、ロウソクを……色とりどりのケーキが並ぶ……

美希の寝息が聞こえる。寝室のベッド。どうやら自分は飛び起きたらしい。額をぬぐって初めて、汗の量に気付かされる。

ベッドから抜け出す。こういうことは前にもあった。前に何度も美希が寝返りを打って、すこしばかり動揺し、そんな自分に余計に腹立たしさを覚える。

プレゼントを開ける、仁はよろこんで母親に駆け寄る

鞆を開ける。部屋の隅に置かれていた簡素な鞆。なんだか分からないガラクタと、うすいノートと、ガムの容器。中にはアヘンがたっぷり詰め込まれている。仁は蓋を開けようとする。

赤色、赤い、赤色、赤色。母は横たわり目を覚まさない。部屋は炎に包まれ仁は立ち尽くし、あるいは泣き叫びながら、再び無色に還るときを待つ。男はまたノックする。ノックする、赤いプレ

ゼントを抱えて、仁は言う、ほつといてくれ、いままでそうしてきたんだから。見知らぬ男はあきらめない

「大丈夫？」

電気がつけられた。持っていた容器を鞆に突っ込む。美希はそれを、怪訝そうに見守っている。

「なにしてたの？」

「眠れなくて」

答えになっていなかったが、美希は追及しなかった。

「私もよ。ビデオでも観る？ すっかり目が覚めちゃった」

美希はホステスだった。若くて魅力的、経済力も悪くなく、クラブで知り合ってからというもの、気付けば彼女のマンションで同棲までしている。いったんはまりこんでしまうと、なかなか抜け出ない。

スプラッターを観ながらご飯、ステーキを頬張れるような女だが、彼女は気が利いていた。あからさまな嘘も笑って言える。

「幽霊つていると思う？」

唐突な話題だったので一瞬へんな顔をした仁に、それに気をつかったのかどうかは不明だが、美希は言葉を付け足した。

「死んだあとが空っぽなんてこわいでしょ？ 幽霊の根拠がほしいのよ」

その意味について考える。人が疑問を口にするのは、たいていその人のなかで答えが決まっているものだった。仁はあえて、少々反抗的な気分で、疑問の「正答」から離れてみる。「俺は逆だな」

美希はあまり驚かない。「へえ。どうして？」

「死んだら消えて、ぜんぶさっぱりする。そう考えるから報われるのに、死後も生かされるなんてたまったもんじゃないだろ」

業火に血が滲み、結合して、あざやかな色彩を描きだす……
母は微笑み、仁に向かつてうなずきかける。ノックの音がして、仁は泣き叫ぶ……それが赤いプレゼントだった。男の愛情を信じ続けること。母は信じて、カットして、神に祈り、ケーキを切り分ける。だから赤色に飲まれていくしかなかった。赤色はたちまち侵食する

そのときの義之は怒っているようだった。

テレビを点けっぱなしにし、ソファーでむっつりと新聞を広げていたが、両方とも内容は頭に入っているとは思えない。テレビの音量は小さすぎるし、新聞なんてしばらくページを捲っていないし、極めつけは瞳孔。なにをどうしたらそこまで静止していられるのだろうか？ きっと思考回路が切断されたか、もしくは慌しく活動しているかのどちらかだ。

伊織も怒っていた。義之の不機嫌は無口に拍車をかけるため、空気が不穏でも原因が分からず、消化不良の喧嘩へ発展したりする。

「ねえ？」

疑問系にしたのはそれでこちらの意図を察してもらったためだった。じっさいふたりは言葉以上に意思疎通が図れたし、これまでもそうしてきたのだ。

「私の言いたいことが分かるわね？」

「いや」義之はばかっぽく言った。怒鳴ってやるうかと思ったが賢明ではないのでやめた。

「休日出勤、休日出勤、またまた休日出勤。やっとの思いの二連休なのよ。それが沈黙で終わる私の気持ち、すこしは考えたことある？」

「同情するよ」

なんの労わりも敬意もこもっていなかった。伊織はため息をついた。

「わかった。言わなくてもいいのよ。あなたの気持ちが凄くよく分かるもの！」

ブーツに足を通していきおいよくマンションから飛び出した。

そのあとは後悔ばかりだった。苛立ちも少なからず存在する。もしも反省ばかりなら、いますぐにでもマンションに戻れただろうに。

伊織は落ち着かない気分で街をうろついた。短気すぎたのではないか、なにか自分が悪かったのでは。しかし、義之の様子については合点がいかなかった。なにせ朝からそんな調子なのだ。あれこれと思索するうちに腹立たしくなり、そんな自分にさらに後悔ばかりが募った。

朝からあの調子ということは、伊織に怒っているわけではないのだろうか。そもそも、あれは本当に怒っていたのだろうか。不機嫌であることには違いないが、義之の感情は判別がむずかしい。理解していた気になっていたが、もしかすると、伊織が思うよりはるかに、複雑な事態に陥っていたのではないか。

それはさすがに考えすぎだろうが、義之に対する腹立たしさは萎んでいった。

伊織は義之のマンションに戻った。なんてばかをしたのだろうか、部屋に染み付いた義之の匂いが実感させた。どうあるのがここ以上にふさわしい居場所なんてない。明日訪れる射撃場を含めても。

空気が動いた。

「伊織？」

義之が言った。その目はまっすぐにこちらを見ている。

「ごめんなさい」

手短に言う。

伊織は彼のほうからなにか言いたしてくれないかと期待した。(ごめんごめん、実は昨日上司にガミガミ言われてさ、なに心配には及ばないよ、だいいち君のせいじゃないし。)しかし義之はなにも言ってくれなかった。

彼は視線を外すと、なにも無かったかのようにテレビのポリウムを上げた。伊織は　そんな状況があるとするなら、一トンもの鉄のハンマーに頭を殴られた気分だった。テレビの中の談笑が聞こえる。

言葉が喉から引いて、それからは衝動と闘わねばならなかった。彼の頭を同様にハンマーで叩き潰したいという衝動。やろうと思えば造作もなく、いまの義之は義之ではなくただの男で、その男はとんでもなく冷酷だった。すべての条件が揃っている。

あとすこし義之への理解が追いつかなければ、じつさい行動に移していたかもしれない。伊織は自分が危険なドロ沼に浸りかけていることに気付いた。ドロ沼の深さに足をとられ、義之自身を簡単に忘れてしまふところだった。彼は絶対に冷酷ではない……と思う。伊織はできるだけおだやかな口調で言った。

「私の求めているものはね」

二連休は消耗品で、それこそあつという間にすぎてしまう。早口だしいくぶん不親切だったが、伊織は急いで喋りだした。

「新聞でも、テレビでも、ラジオでもいい。それをふたりで共有しあって、たくさんの意見を交わすこと。ううん……たくさんじゃなくてもいいわ。重要なのは向いている方向なの。たくさん話しても、向いている方向が別々なら最悪だし、会話すらなかったらさら

に最悪。分かるわね？」

声に厳しさが加わってきたことに、伊織は気付いて愕然とした。ささいな引き金が一ステリーまで呼び寄せていたようだ。（だれに怒ってるわけ？）苛々しながら吐き捨てる。（ぜんぶあんたが悪いんじゃないの？）

「ごめん」

義之があっさりと言った。思考は途切れた。

「いやな思いをさせるつもりじゃなかった。謝っておくべきだな。俺はただ、ほんとうに、”新聞を読んでいただけ”なんだ」

伊織はなにも言わなかった。

振り返ってみると、あの瞬間ほど異様なものはなかったのだ。義之が突然、義之と名乗るだけの人物に変わってしまった瞬間。ありとあらゆる魅力、義之を形成するすべてが消え失せ、名前だけが残ってしまったあの感覚。

二連休が潰れたことはもちろん、それ以降思い出さずにはいられない、あのときの義之を覆っていた黒い影のようなもの。喋っていたのは義之ではなくそいつだった気さえする。

それからしばらくしてからだったが、ふたりがベッドで情熱を分かち合ったあと、すべてが終わったあとで、伊織の髪をなでながら、義之が言った。

「伊織」

眠りに落ちる寸前だった。伊織は目を開けた。「なに？」

「すきだ」

言葉が詰まった。髪をなでる仕草も、酔っているようには見えな

かった。伊織はすこし間を置いた。

「私もよ」

「よかった」

義之はそれだけ言った。そのまま眠るのかと思った。だが、また唐突に口にした。

「喋ってくれないか」

「うわごとのように続ける。」

「眠りたくないんだ……いやな夢を見る」

あるいは電気を点けて、彼の表情を確かめる必要があつたかもしれない。普段の彼から考えると、そこまで感情を披瀝するのは珍しかった。

しかし（だからこそ）彼に対して払えるであろう最大の敬意を払おうと思つた。伊織は暗闇でほほ笑み、彼が眠るまで喋り続けた。

そのときの予想は的中した。つまり、翌日になればすっかり元通り、義之は自分が喋っていたことなど、すべて忘れるという予想だ。そのとおりになつた上、それだけではなく、伊織自身もすっかり忘れた。

眠りに落ちる寸前に思い出したように義之は言った。

「おふくろが死んだ」

「知ってるわ」

そして義之は眠つた。彼の母親は伊織が彼と出会う五年前に他界していた。伊織も眠つた。そして翌日、すべて忘れた。

そのときの会話こそがいつかにあつた不機嫌の根源であると、伊織は気付かなかつた。

現実と虚構の境はいつも揺らいでいる。

まともな人間ならば踏み入れられないような、しかしほんのすこしでも隙間がありなおかつ脆い人間ならば、簡単に見分けがつかなくなってしまう境が。

きっと伊織もふとした拍子に、「あちら側」へ行ってしまっただろう。一度行ってしまったら、二度と戻れないかもしれない。独りよがりな予感は何れでもたまたまなく恐ろしかった。今いる場所はずでに、虚構と呼ぶべき場所かもしれないのだ。

それはどこから襲ってくるのか分からなかった。伊織は常にアンテナを巡らせ、現実だと実感できたころ 義之の死去以前の自分を思い返して、必死に演じた。どこにも行きたくなかった。自分を変えるものは何もないと、納得できる材料がほしかった。

伊織はぎゅっと目をつむった。ドアノブの冷たさが指に痛い。次の瞬間にはにやにやしている自分にショックを受ける。感情も、景色も、なにかのフィルターを通したように、まるで現実感がない。後ろを振り向きかけた。

うんざりしてドアノブを捻った。

日曜の午前八時、子供たちの笑い声が聞こえる以外は、マンション内は静まり返っていた。

第10話：和泉

伊織ははじめに八代について出来るだけを知っておこうと思った。夕方まで時間を潰し、川添組の領域とされる繁華街へ向かった。

煌びやかな服装、見られることを常に意識しているような人々、見るからに柄の悪そうな連中もいて、自分の住む世界との差異をはつきりと感じる街。もっとも、それは川添組のことを踏まえたうえでの印象で、きっと大多数の人間は、煌びやかな街だと感じるはず。忙しなく行き交う通行人が、ここにある時間の速さを物語っている。

伊織は近くのクラブとおぼしき店に入った。時間帯のせいですいていた。店員の視線の多くがこちらに注がれるので、女一人客であることに気詰まりを覚えてしまいが、伊織以外のだれもそれを気にした様子はなかった。

ジンベースのカクテルを注文し、カウンターに座って、伊織は落ち着きなくあたりを見回した。

客は少ない。八代のことを聞くなりませんでした。でも、どうやって？

運ばれたカクテルをしばらく見つめる。意を決し、伊織は顔を上げた。

「あの」

声小さくなる。

「八代寛之という男を知りませんか」

知っている。一瞬でそう確信した。店員は目を細めて、ほかの店員と顔を見合わせたあと、事実とは違うことを言う。

「いえ」

一応、とってつけたように言い添える。

「どなたのことでしょう？」

この付近で八代は、すこしは名の通った存在らしい。伊織は情報を整理すると、それならいいんです、と頭を下げる。カクテルを傾ける。

女がこちらを見ていた。店員のうちのひとりで、明るすぎない茶髪に白い肌。その女も、伊織を見つめていた。躊躇なく、ひたすら視線がそそがれる。

伊織は立ち上がった。女の視線も移動した。これ以上ここにいたくなくて、勘定を済ませて店を出ようとしたが、ふと、肩を掴まれる。この女は異常者？ 慣れない街への不信任感が、最悪の形で現われようとしていた。伊織は女の手を振り払い、彼女を強く見返した。

「あんたの知りたいことだけど」
視線をゆるめる。

女は、思いもよらず幼い声で言う。

「八代のことでしょ？」

「なにか知ってるの？」

伊織が訝しげに問うと、女はひとつ咳払いして、額にかかった髪をはらった。路上を行き交う人々が、心なしかこちらを見ている。女の瞳がいやらしく輝き、わざとらしい沈黙の意図にようやく気付いた。

「なにがほしいの？」

よそよそしく言うと、女は、面白そうに笑う。頬にぼつと熱があがって、この小生意気な少女にからかわれたのだと思った。伊織は踵を返してその場から遠ざかるうとした。

「あんた、八代と寝たの？」

女のぞつとするほど無感情な声が聞こえる。

「でなけりや身内が殺されたか」

それから、鼻を鳴らす音。目を細めてそちらを見る。二十もまだ越えたばかりかというこのガキに、わたしはことごとくコケにされている。このわたしが！それでも女の言葉が気にかかり、そんな自分に一番腹が立った。

伊織は顎を持ち上げ、彼女を品定めし、札を数枚握らせた。「知っているなら教えてほしいわ。なにも知らないなら黙って」

女は数枚の札と伊織とを見比べ、短い思案をめぐらせた。「アパートに来る？」

9

いつも深夜まで飲み歩いているものを、今日はそんな気にならなかったのは、昨夜みた夢のせいなのだろうか。

臼井仁はぼやきながら、地下鉄の車窓に死んだように映る自分の顔を見た。ずいふんと身体が重いし、なにも考える気がおきない。美希のマンションに帰ったところで、どうせ彼女は仕事だろう。

仁はレイトショーを狙って映画館に足を運んだ。中年の一人客、たまにカップルもいて、この時間帯でもそこそこ繁盛している。ちょうど十分後にアクション映画の上映があった。

「大人一枚」

二十代前半の女が、受付に身を乗り出しながら言う。

「1800円になります」

女はそのとおりの金額を素直に払った。仁は気にしつつも、無視

を決め込もうとしたが、どうしてももやもやしたので、受付の女に言う。

「1200円だ」

「はい？」

突然の介入に、女店員は困惑した様子だった。客のほうも仁を振り返り、訝しげにしている。化粧は薄いが美人だった。俄然、自分の行動に乗り気になった。

「レイトショーだから。値段が下がる」

女店員が少々、不満に顔をくもらせる。すぐさま青ざめる。

「失礼しました」

お釣りを渡し、丁寧に頭を下げるが、それでもまだ新米なのだと分かった。客は仁を見つめ、躊躇いがちに微笑んだ。

「わたしも気付かなくて……ありがとうございます」

仁は、自分にそそがれる、熱のこもった視線を期待した。すべての女性がそうであったように、彼女もまた、彼の外面的魅力に引き込まれ、熱っぽく見つめてくるであろうと思っていた。

だが女は頭を下げると、チケットを握りしめ、さっさと劇場に向かってしまった。顎を引いて、いかにも自信なさげな歩き方で。昂りが一気に冷めるのを感じた。彼女はほんとうに何の気なしに映画を観にきただけの、ただの一人客だったのだ。しかもかなりださい
ジーンズにシャツの重ね着 仁はみるみるどうでもよくなっていた。手に入らない女性への執着も人一倍感じないほうだったので、アクション映画のチケットを購入し、悠然とした足取りで受付を去る……去ろうとする。

例の女の客が、山盛りのポップコーンを辺りにぶちまけ、掃除す

る店員を申し訳なさそうに見つめていた。

小柄な身体に不似合いの豊かな乳房。さぞかし卑しげに彼女を一瞥したところで、ポップコーンにまぎれたチケットに気付き、仁はそれを拾った。聞き覚えのない洋画タイトルだった。

神の啓示だろうか？ ばかばかしい。

「落ちてたよ」

ひとによっては不快に感じるほど馴れ馴れしく、仁がチケットを渡すと、幸いにも女はやや気恥ずかしそうにありがたがった。

「やだ……何度もすみません」

「いいや」

仁の頭が、ふいに、理論的な働きをした。これはそう男を見る目に肥えていない。見られることに慣れていないし、そういう女は、大多数の男にとっても好ましかった。美人だがホテルに連れ込みやすい女。

「ひとりで来てるの？」

言った瞬間に、うんざりした。興味を持たれていないにも関わらず、自分はこの女に、なんとも都合のいい計算をはじめ出したのではなく、不恰好なアプローチまでしてしまっている。いくら彼女が男慣れしていなくても、こんなチープなナンパに引っ掛かるとは思えない。

仁が冷静さを失ったのは、彼女が奇妙に魅力的なせいだった。というよりほとんど、珍しい昆虫を見つけてよろこぶ子供の心境に近い。美希やクラブなどで引っ掛けた女たちと違って、彼女のいたって健全な魅力。もちろん「男にとって好ましい女」であることも大きいだけだ。

女は一瞬、訝しげに仁を見つめて、観念したようにすこしだけお

だやかな瞳に戻る。

「ええ……映画は、ひとりで観るほうが好きですから」

やんわりと釘を刺されていたが、仁はもうすこしだけ押ししてみることにした。

「俺もひとりなんだ。よかつたら」

「いいえ、ちよつと。ごめんなさい」

「どうしても？」

「そうですね……」

女が頼りない笑みを浮かべたので、仁は表情を引き締め、だれからみても端整といえる顔立ちを意識した。

「映画がすきなんですか？」

「もちろん」嘘だ。

女は微笑んだ。

「席に行つてます。Gの七」

仁は女の背中を見届けるひまなく、チケット売り場へ急ぎ、彼女と同じ映画、Gの八の席を購入した。上映まで時間がなかったため、飲み物は買わなかった。

席に座ると、予告編が始まったところだった。仁は女の横顔を気遣わしげに眺めていたが、心から映画に没頭しているのだと分かる。スクリーンに視線を戻し、それから二度と女を見ることはなかった。出来のいいCGが寄せ集められた予告編、または壮大な音楽を流し、感動映画であることを前面に押し出した予告、女はそんなものでも片時も目を離さなかった。

本編が始まり、ついに仁は居心地の悪さを実感した。というのも、劇場は女性客ばかりで、タイトルだけでは分からなかったが、この映画はラブロマンスなのだ。

落ち目の二枚目俳優が主演で、ヒロイン役の女優は美人だが無名だった。

罪と喪失の話だった。主人公は何度も、それこそ仁から見れば苛立たしいほど執拗に、同じ失敗をくり返した。そのたびに喪失記憶を手放すことで自分を解放しようとし、その試みはたいてい成功する。ヒロインはまっさらな人間で、最後の最後に、主人公の罪を責め立ててしまう。主人公はヒロインを手放そうとする。

さようなら。

美希ならたぶん爆笑しているだろうが、隣のほうから、鼻をすする音が聞こえた。ヒロインが主人公をやさしく抱きしめる。喪失ではなく受け入れられることで、主人公は罪を乗り越える。

最後の最後に、ヒロインが自分のあやまちに対して小さな嘘をつく。そこで物語が終わり、クレジットが流れ出す。しばらくだれも席を立たない。上映時間は100分をきっており、ストーリーも怒涛の勢いで過ぎ去っていった。

「いい話でしたね」

ショッピングモール最上階の映画館を出て、エスカレーターで一階に下りるあいだ、女は我慢できなかつたらしく、そう仁に言った。「アカデミーノミネート作品だけありました」

喫茶店に入ってから、しばらく会話に困らなかつた。女はまず、自分のことを和泉いづみと名乗り、映画について興奮さめやらぬ口調で語った。和泉は女子大生だつた。あと一年で卒業だという。仁は職業のところだけ適当にごまかし、二十六歳だということは素直に教えた。お互いこれがナンパだということを忘れていたし、和泉はまるで絶好の話し相手を見つけたように笑顔だつた。

「罪と罰……っていうほど重くはないけど……ラブストーリーというよりは人間ドラマでしたね」

「最後、あやまちはくり返されるってことだろ？ ハッピーエンド

「じゃだめだったのかな」

「いいえ」

「ちがう？」

「くり返すことがハッピーエンドなんだと思います。主人公がヒロインの罪を背負わないと、恋人や友達なんていう平等な関係が成立しないってことなんです。ほら、主人公がヒロインに母親を求めるシーンがありましたよね……」

そのあとも話は止まらず、主演俳優や監督についても言及し、意見を交わしあい、和泉のもっともらしいうちくも多かったが、それでも相手を不快にさせない力が彼女にはあった。話がうまいというのではなく、時折浮かぶ躊躇いがちな表情が、こちらを気遣うような視線がたまらなく魅力的だった。

「ごめんなさい。話しすぎちゃったみたい」

十一時もとづくに回ったところ、店内の時計に気付いた和泉はあわてたように言った。仁は伝票を持ってレジへむかった。具合のいいことに、金は腐るほどあるのだ。

シヨップピングモールを出てすぐ、和泉はタクシーを呼んだが、彼女がまだ話し足りないだろうということに、仁は気付いていた。具合のいいことだらけだ。

和泉の黒髪がなびき、風にさざめく。視線は彼女の身体へ下りていき、首筋から乳房へ、腰から腹のあたりに移り、さらにその下を眺め回していく。仁は彼女の腰を引き寄せ、驚いたような彼女に低くささやく。

「今晚、付き合わないか」

和泉がさつと視線を上げた。タクシーがきたのだ。

彼女の興味の対象は、いまや完全にタクシーに移行している。

「ごめん」

仁は情けなくなり、素直に和泉の身体を離れた。だが和泉は顔を上げると、場合によっては間抜けな、おだやかな笑みを浮かべた。「いいえ。すごく楽しかったです。ああいう話を聞いてくれる人、なかなかいないよ」

ふたりは連絡先を教えあい、和泉はタクシーに乗り込んだ。呆けたようにタクシーを見送りながら、仁は、彼女の言葉を思い返していた。(つまり、次があるってことだろうか?)心のうちに、なんの意味ももたないのに、そう問いかける。いや きつとある。彼女の様子を思い出すに、きつと次があると、仁は確信していた。

そんなのは初めてのことと、しばらくどうすればいいのか分からなかったが、タクシーが視界から消え失せても、仁は、道に立ち尽くしていた。なぜそんなふうになったのか、自分でも分からなかった。

携帯が鳴る。ありえないのに、和泉からかもしれないと思う。美希からだった。

ためらった末に、コール音はすぐに止み、仁は静寂を感じた。

第11話：つながり

10

その女の「住まい」は、高給取りである伊織にとって、ひどく馴染みのないものだった。コンビ二弁当のおいが漂い、キッチンも含め一間となっている室内には、ノースリーブ姿の女が居眠っていた。

「シヨウコっていうの」

女は、そう言ってから肩をすくめる。

「その眠ってるやつがね。あたしはヒトミ」

ヒトミは、まるで起きる気配のないシヨウコを無視して、伊織に畳みに座るよう命じる。彼女自身はキッチンに立ち、お茶をコップにそそぎ始めた。歓迎してくれているのかもしれないが、それでも伊織は落ち着かない気分で見回した。なにかとんでもない所に来てしまったのではないかと思った。

「オバサンのくせに世間知らずだね」

まるでヒトミは、こちらの怒りを誘うような口調だったが、彼女の意思に反して、後半はほとんど耳に入らない。（オバサンですって？）

「目をつけられたいの？ 八代を調査してまわるなんて」

コップが指先に押し付けられる。ヒトミの小生意気な態度が、すこしだけ和らぐ。

「名前は」

「伊織。羽鳥伊織。まだ二十代」

「飲めば。おいしいから」

しびしびコップに口をつけると、苦味が体内を切り刻んでいくのを感じた。いままで、そんな状態の存在を知らなかったが、言ってみればそれ以上の表現はない気がする。騙されたのかと思っただが、ヒトミのお茶を啜る顔は、心底おいしそうだった。

伊織は顔を離して、その理由のために話し始める。

「八代のことを知ってるのね？」

「知らない奴なんていないんじゃない。あの辺りに限って言えば」

ヒトミは大きくお茶を啜り、驚異的な味覚を披露したあと、意外にもすこし物憂げになる。「あいつは最悪だったわ」

「最悪？」

「ロリコンのクソジジイ。あの付近の店舗はぜんぶ、川添組に癒着しないと生き残れない。なんたつて縄張りの真っ只中だからね。川添組は交渉がうまいのよ。じっさい、困ったときはそこそ頼りになるし……八代はあたしを気に入った。あたしのためならなんだってしてくれたけど、まあ、そのぶんこっちもサービスしたし。問題は、あいつがプライドや意地じゃなく、保身のために生きてるってこと」

「彼は殺人を犯すと思う？」

「そんなの罪にもならないよ」

なんとなしの言い方に、ヒトミが事実を言っているのだと分かった。ヒトミの目が鋭く輝き、伊織になんらかの説明を求めていたが、ヒトミの言葉を咀嚼するまで、しばらくの沈黙を作った。

「ヒトミ」

先ほどまで寝入っていたノースリーブ姿の女が、上半身だけを起き上がらせ、弱々しい声音で言った。

「その人、義之さんのことを言ってるんじゃない？」

ヒトミはシヨウウコを一瞥すると、伊織に向かって言う。

「なんだ。オバサン、義之さんと付き合ってたの？」

伊織は反射的に身を固まらせた。ここで義之の名を聞くことが、ひどく場違いだったし、宝物を足で踏んづけられたみたいで、ヒトミに反感すら覚えた。

そんな恨みがましい視線をどう捉えたかは知らないが、シヨウコは肩をすくめた。

「あたしはなにも知らないよ。義之さんのことだつて、ニュースで聞いたただだし。八代が捕まらなかったのは残念だけど」

「捕まるべきだったと思うの？」

伊織の問いに、ヒトミは再び肩をすくめた。つまり彼女はなにも知らないし、なにも断定する立場にないのだ。難しい問題に向かつて、早々に解答を諦める学生のように、飄々とした彼女に腹が立つたが、その瞳に、微かな憐れみがかがえたことに気付いて、伊織は当惑した。彼女は伊織を憐れんでいた。

こんな少女に同情されたところで、余計に哀れになるだけなのに？　だが、ヒトミはそれを知っていて、わざと憐れみの感情を閉じ込めているのだ。伊織にはそれがよく分かった。こんな少女に気を遣わせてしまうほど、自分が不安定な存在だということも。

「前にも……八代のこと知りたがってた人がいたわね」

シヨウコがそわそわしながら言う。ヒトミは彼女につまらなそうにうなずいた。

「臼井だつたつけ。最近は見えてないけど。顔立ちだけはいい、むかつく男だね。そんな奴にまで恨まれて八代も気の毒だわ」

顔立ちだけはいいむかつく男？　伊織はその説明に噴き出しそうになったが、ヒトミに冗談を言ったという表情は浮かんでいない。

「その人は八代に会えたの？」

「さあ。最近は見えてないんだつて。八代に消されでもしたんじゃないの」

心臓が凍った。

ヒトミはいまも、「冗談を言ったという表情は浮かべていない。
「だから八代に関わるべきじゃないのよ。義之さんのことは気の毒
だけだよ」

その後一時間ほど質問を続けたが、期待していたような情報は得られなかった。物欲しそうなヒトミに万札を握らせてやると、なにかあったときのためにと携帯のアドレスを教えられた。じっさいはそうやって金を巻き上げられるだけのようだが、伊織は素直に自身のアドレスも相手に教えた。

これからやることは決まっている。

「もしもし」

携帯の向こうから聞こえたのは、まぎれもなく彼の声だった。六、七年ぶりでも声を忘れていなかったのは残念だったが、ヒトミの予想が外れていたのはありがたい。

「伊織。羽鳥伊織だけど」

伊織はおだやかに言った。

「覚えてる？」

「ああ」

そう言いつつも、記憶の糸をたぐっているようだった。

「あんなの」はどうやら、いまも昔も変わっていないらしい。伊織は彼の人生に、一度でもヒロインとして登場できただろうか？ 伊織はしばし追懐して、最悪のやりかたで彼をふった当時の自分を思い出し、一気にどうでもよくなった。

「義之のことは覚えてる？」

「あいつはいい友達だった」

(つまり皮肉ね)

「ごめんなさい。わたしがばかだったわ。でも、話を聞いてくれる？」

電話の向こうのあんなの　白井仁は低く喉を鳴らした。さつさと話せということらしい。伊織の非常識にうんざりし、表面的な魅力もすべて引っ込ませ、仁は敵対心剥き出しで応対してくれた。善意にまどわされないぶん、伊織にとっても好都合だ。

「八代のことだけだ」

11

仁は通話を経ち、頭の痛い思いで　じつさい頭は痛かったが椅子に深くもたれかかった。色々言いたいことはあるが、八代がロリコンだとは知らなかった。彼女が自分に電話してきたのは、ヒトミから聞いたせいだと言っ……そもそもヒトミってだれだ？　そう思いかけて、白い肌の女を思い出す。自分はその女と寝ただろうか？　ともかく、相手がなにを求めているにしろ、この機会を生かさなければ　仁は八代をできるだけ知りたかった。

「上納金が増えたというのは？」

仁は少々苛々しながら言う。高田の目に愚鈍な光が走る。なんにもかも自分の好きにやってきたような男だから、他人に突っ込まれるのが嫌いなのだろう。

高田はダンボールの携帯を並べる　意味はあるのだろうか？

高田は顎を持ち上げ、ゆっくりと仁を見下ろす。本人は威圧的なつもりだろうが、これも頭痛の種だった。

「今月から二十万。ぐずぐずしても、お前らの稼ぎが無くなるだけだぞ」

仁は高田が無理をしているのだと思った。勝手に額を決め、勝手に貢いで、勝手に昇進するつもりなのだろう。そんなことは無理だ

が。いま上納しているだけでも手一杯なのに、二十万をどこから集金するつもりだろう？ たぶん高田が勝手にやるだろう。ここではだれも高田の命令など聞かないし、聞く必要がない。

仁は携帯を握りしめた。今夜は酒でも飲もうと思った。

ベッドに女を押し付けて、その女はだれだったかと悩む。

毎晩毎晩、男女の交わりほどバカバカしいものはないと思っているが、それでも当たり前のようにこうしているから不思議だ。女になかに自分を感じるのが、あるいは男にとっては呼吸のようなものなのかもしれない。

身体の昂りを感じると、仁は時折、目を閉じた。そうするとなにかが掴めそうな気がした。だがそこにあるのは一面の闇で、仁は結局、また目を開けた。

「あたし、川添組って大嫌いなよね」

ベッドに腰かけ、煙草を口にくわえながら、いかにも面倒そうに女が言う。仁は仏頂面で言う。

「消されるぞ」

女が笑う。べつに笑い話ではない。

「携帯鳴ってるわよ」

脱ぎ散らかしたジーンズを漁った。たしかに鳴っていた。発信者の名前を確認し、思わず小さく舌打ちする。仁はそのまま着信を無視した。

「仁？ いまどこ？」

ホテルを出ても、電話の相手はしつこかった。四回目に鳴らされた電話に、ついに仁は観念する。先ほどの女を頭から押し出しながら、携帯を耳に当て、応答する。

「クスリはやらないで」

美希は切羽詰った様子だった。仁は言う。
「見たのか」

繁華街の光が目にも痛い。仁はゆっくり歩き出し、彼女の言葉を待った。耳鳴りがして、同時に頭が痛かった。両側から圧迫されている感じた。美希はなにも言わない。頭が痛い。余計に酷くなる。

「ほかには？ なにを見たんだ」

携帯の向こうで、美希が息を飲んだ。たしかに、その音が聞こえた。思案のほどを感じさせる長い沈黙のあとで、美希は静かに言った。

「ごめんなさい」

「謝るな」

「そんな……怒るとは思わなかったから」

彼女は鞆の中身をすべて見たのだらう。アヘンと、ガラクタと、薄いノート。

「お母さんの日記？」

仁はそこで電話を切る。受容とは、仁のなかで大きな意味があったが、それはすべてを捨てることには繋がらない。ことさら、自身を切り刻まれることに関しては、自身の過去を解体して、売り物かなにかのように並べられることに関しては、だが仁は、ただ漠然とした不快感を覚えた。

目を閉じても開けても、ネオンの彩りが瞳を刺激した。それも頭痛の原因だった。

第12話：亀裂

12

仁は思いのほか協力的に、二日後、レストランで会おう、と提案した。渋るわけにもいかなかった。いままで過ごした時間に比べれば、たかだか二日、大したことはない。八代の名前を出したとたん、あの調子ということは、彼はなにかを知っているのだ。

仁と義之は、最近はともかくとして、友人だった。仁は義之のために、八代を嗅ぎ回ったのだろうか。たぶん、違うだろう。伊織はベッドに腰かけ、銃身内をオイルで洗浄していた。ブラシでこするが、普段からクリーニングに余念がないため、それほど汚れがつかない。

「よう、相棒」

銃身内にブラシを突っ込み、ふざけた調子で言う。

「これってすごい確率だと思わない？」

「ここが我が相棒のすばらしいところだ。説明も、筋立てもいらないし、彼のがつしりした重みを感じるだけで、以心伝心できた気がする。」

「すごい確率だわ……」

仁との電話のあと、伊織は、相棒を連れて高速を飛ばした。週末ということもあり、まずまずの込み具合だったが、夕方ごろには射撃場に到着した。プラーハウスの丸めがねの男は、二日続けての伊織の訪問に興味を示した様子だったが、プレイが終わったあと、間違いなく、興味はさらに膨らんだだろう。

いかにもいやみったらしい、保守的な男が、女のプレイヤーである伊織を見つけて、訝しげな顔をしたのを覚えている。そして、銃

の反動や重さ、標的の速さにてこずって、伊織がスコアを伸ばせないことを予測し、親切なことに、身体が受ける衝撃さえも心配してくれた。スコアだけで言うところには、数日前ならばそうだったかもしれない。だが今日の伊織は好調だった。銃を手にし、射台に足をつけた瞬間、八代のこと、義之のこと、なぜかはつきりと理解した。仁のことも、浅倉のことも、相棒のことも、ほかに、ほつたらかしのピアスの位置なんかも、明確に浮かんできた。それから伊織はがむしゃらに撃った。頬が衝撃で歪んで、標的は四方に砕け散った。肩が大きく沈みそうになった。だが、姿勢を崩すことなく、撃ち続けた。

伊織は今日、過去最高点を記録した。昨日のプレイなどとは違って、現実にはなにひとつ忘れられなかったが、景色は歪まないし、なにより気分が良かった。控え室に戻ると、例の男が伊織を見ていた。銃をしまいおえた伊織に、女だけどよくやる、と言ってきた。伊織は鼻で笑ったが、ひさしぶりに他人に認められた気がした。射票は机の奥でぐしゃぐしゃに突っ込まれている。

伊織は手を止める。安堵感や、満足感など、銃がもたらしてくれたものがすべて消える。
インターホンが鳴った。

「はい？」

追憶から戻りきらず、間の抜けた返事をしながら、ドアを開ける隣室に住む老婦人だった。人のよさそうな顔で、にっこりと笑みを浮かべている。伊織は反応に困ってしまう。

「こんにちは」

型通りの挨拶。老婦人は、すこし頭を下げて、同じ挨拶を返した。「紅茶のシフォンを焼いたんだけど」

そして、手にもっていた紙袋を差し出してくる。

「好きかしら」

魚の煮付けとか、自家栽培の野菜ならともかく、紅茶のシフォンとは。あまりに上品すぎて、少々の笑いが禁じえない。

「好きですけど……」

大好きだ。甘さには依存性がある。伊織は紙袋を受け取り、婦人に向かって微笑みを浮かべた。今日はそう悪くない、めずらしい出来事に恵まれた日だ。婦人の皺がよった目尻に、やさしげな表情が刻まれて、自分が彼女をまっすぐに見つめていたことに気付いた。老婦人も伊織を見つめ、ふと笑みを引っ込める。

「無理しないで」

労わりに満ちた声音で言う。

「だけど元気になって」

他人へのやさしさを、おせっかいだと思わせない力が、彼女にはあった。母親からもらう愛情のように、さも当たり前で、自然なのだ。彼女は言葉を続けた。

「ちがう仕事を始めてみたら。なにか簡単なことを。打ち込めること……考える時間がたっぷりあるのは、あまりいいことじゃないのよ」

「分かっています」

「分かっているわ」

伊織は静かに言った。

「じゅうぶんに、そのつもりです」

仁の話を聞いてから。あるいは、八代について調べ上げたら。義之のことが忘れられたら。婦人の瞳がわずかに同情の色をたたえた。そこで、老婦人に覚えていた親しみが、儚くうすらいで、消えた。代わりに、攻撃的な牙がむかれる。

「理由がいりませんでしたか」

伊織は言った。

「少しでもなにかを知りたかったでしょう？ その場にいあわせたすべての人間が憎くはありませんでしたか？」

たじろいだ彼女に、一気に畳み掛ける。

もうさつさと部屋に戻りたかった。さつさとベッドに腰掛けて、煙草でも吸いたいものだ。老婦人は表情ひとつ変えずに、否定も肯定もしないまま、言った。

「だけど、息子は帰ってこなかった」

伊織は息ができなくなる。背後に我が相棒がいて、事の成り行きを見守っている。だが彼は、励ましてくれることも、婦人を追い払ってくれることも、ない。どちらにしても、伊織はこれから煙草を吸うだろう。胸が重苦しく、伊織は深呼吸をする。

十一年前、寺本夫妻の息子は事故にあい、亡くなった。加害者の運転手からはアルコールが検出され、ろれつが回らないほど泥酔状態だった。伊織の言葉は、婦人は深く傷付けた。息子は帰ってこなかった、と、もう一度言い、婦人は目を伏せた。

居心地の悪い空気がただよった。伊織は彼女に、息子さんの墓はどこか尋ねた。紅茶のシフォンはおいしかった。

13

金を手に入れる。口座などは使わない。現金でぼん、と二十万。金を財布におさめると、仁は和泉に電話をした。声が変わにこもらないよう、心のなかで注意をはらったが、じっさいはすらすらと言葉に出せた。和泉もまんざらではない様子だった。今度の土曜日、駅前で会う約束をして、電話を切る。

ここしばらく、美希とは話していなかった。合鍵で部屋への出入りは自由にできるものの、そろそろ潮時かとも思う。そこで、今度の拠点に和泉を選んだって、なんにも悪いことはない。

それから仁はヒトミに会った。会うのはひさしぶりだったが、彼女の態度はごく変化のないものだった。いくらか、アルコールの高い飲み物を注文し、疲れをほぐした。何歳年下かは知らないが、ヒトミは頭のいい女だ。八代を話題にしたときも、極めて的確な返事しかない。

「電話がかかってきた」

仁は酒から口を離し、言った。

「あんたが教えたのか」

電話の内容も、「八代はロリコン」説も、特に隠す必要がないので、ヒトミにすべて教えた。ヒトミはしばらく、沈黙したあと、小さな声でつぶやく。

「あーあ、あの女」

ヒトミの部屋はテレビが点いていた。つまらない二時間ドラマがクライマックスをむかえていたが、ショウゴはそれに見入っていた。まるで、仁のことが目に入らないとでもいうような態度に、とりあえず、名前を名乗ると、彼女の興味をどうにか得られたらしかった。ヒトミの淹れたお茶をすすった。そして三人は、旧友かなにかのように、話した。

「しばらく喋ってなかったから　そんなことはどうでもいいけど、仁。いまだどこにいるかどうかも問題じゃないのよ。わたしは、これが一週間だけ　ハムスターを飼おうと思って。イカしてんでしょ。だからペットショップにいるわけ」

それから仁は、携帯を閉じる。ここに来てから、三時間が経過していた。美希からの不意打ちの電話に、うっかり応答してしまったのだ。それを横で聞いていたヒトミが切なそうに、すこし目を細める。

「恋人？」

言った瞬間に、ヒトミはげらげら笑いはじめた。なにがおかしいのかは分からないが、うつつとらしい女だと思った。

話し疲れたのかシヨウウコは寝入り、テレビは小規模のトーク番組を流している。

「顔はいいのに」ヒトミは言う。

「それが取り柄なんだ」

仁は素直に答える。

「この俺が性格までよかつたら、とんでもないことになると思わないか」

しばらく二人は、互いを見つめていたが、ヒトミがまたもや笑いはじめた。仁は少々うんざりする。

「あなたのお茶は苦すぎやしないか？」

「そう？」

それからヒトミは、お茶を飲み下した。

「前に付き合ってた人が好きだったんだよ」

それから仁は、お茶を飲み下し、マンションに帰った。暗がりの部屋に灯りをとまずと、まっさきに鞆の中身を確認する。アヘンは処分されていない。仁は、一冊のノートを手にとった。なにがあるかと、これだけは、他人に切り刻まれてはならない。明確な意思ではなくとも、そう感じる。

臼井幸代

一ページ目のその文字を流し読み、仁はノートを鞆に戻した。

第13話：対面

14

「化粧のノリが悪くなったんじゃないか」仁は言った。
「そっちこそ、顔色が悪いけど」

伊織は労わりを込めた笑みを浮かべた。

レストランのざわめきが聞こえた。そこかしこで、夜のピークをすぎたおだやかな話し声が飛び交う。食器の触れ合いと、咀嚼の音。ひとつテーブルを挟んで、向かい側の仁を見やる。

仁に対してかけた言葉は、皮肉ではなかった。じつさいに彼は顔色が悪い。時とともに、危なげで、なにもかもが若々しかった瞳は消え失せ、代わりに、諦念じみた疲れが浮かんでいる。ただ、奥のほうで渦巻く、さめた獯猛さは、いまだに変わらないでいた。

「まさか俺のところに来てくるとは思わなかったよ。なにをこそこそ調べてるんだ？ 終わった話を蒸し返すように？」

「なにかあると思うからよ」

「正確にはあったんだ。いまはない。俺が思うところによると、あんたが一生かかってても、あると思ってるうちは見つからないな」

「わたしが聞きたいのはねえ、ごたいそんな哲学じゃないのよ。義之のことで、それに八代のこと」

「なにかあると思うから？」

伊織はしばし、彼がなぜそんなことを言うのか考えてみる。

「分かってるんでしょ？」

その答えは適切ではない気がする。それでも仁は、観念したのか、思いもよらずおだやかな表情を浮かべる。

「ロリコンについてか」

「そう。あのロリコンについて」

「まずはあなたの話からだぜ。呼び出したのがそっちなら、これだようやく平等ってもんだろ？　ありがたいことに、時間はたっぷりあるようだし」

度を越して仁はやケになり、虚無を、あるいはおだやかさのように見せかけているだけなのだと思付く。そういった表情を、以前は見る事がなかった。以前の彼は、冷酷だったり捻じ曲がっていたりしたが、真正銘、からっぽになってしまふことなどなかった。彼のルックスも、もはやそれほど魅力的には思わなかった。伊織にとって、好ましくもあるが、悲しく、痛ましい事実でもあった。

「話すほどのことじゃないのよ。どうして義之があんなことになったのかも知りたいし、八代にもむかついてる。でもたいして知らないのよね。わたしは、終わらせたいの。真実が分かれば終わるのよ」「あなたのやるうとしていいことには、まるで意義がない。義之にえらくご執心のようにだが、それはあいつが死んだせいだろ？」

そう言っ、仁が溜め息をつく。伊織はいまどんな顔をしているのだろう。

「ほんとうになにも知らないんだな」

それは、伊織に向けて言われたのかどうか、分からなかった。

テーブルの上に、一冊のノートが投げ出された。表紙に、火であぶられたような跡があった。ちらりと仁の顔を確認してから、それを手にとった。一ページ目を捲ると、最初に、女性の名前が目飛び込んでくる。

そこだけは少々気まずそうに、仁は言った。

「俺の母親」

「あの亡くなった？」
「他にだれがいるんだ？」

臼井幸代。

自殺したと聞かされていた、彼の母親の名前は、いま初めて知るものだった。ノートは半ばあたりまで、文字でびっしりと埋め尽くされている。

彼女の日記だった。

一瞬、読んでいいのかどうか迷うが、仁の視線は、それをうながしていた。伊織は文字を目で追った。

昔の人らしい崩し字だが、伊織の目は見逃さなかった。
八代、とある。

その日の日記は、幼少時の仁の話題で埋め尽くされている。後の日記では、八代寛之、とフルネームで記されていた。同姓同名の可能性は考えなかった。無意味だった。

金銭的な苦しみが、息子への愛情が、八代への確執が綴られている。やさしさの裏の憎悪が、仁には言えなかったが、息子に対する疎ましさ、感じられた。臼井幸代の日記は、人生と自らへの諦念に満ちていた。

ページの後半は派手に破れていた。仁が言った。

「父親について、長いあいだ聞かされてなかった」

内心の伊織は、口をぼかんと開けていた。

それを表に出さないように、なんとか自然に言ってみせた。

「世の中って奇怪なものね」

「驚いてないな」

「驚いてほしかったの？」

考えてみれば、特に珍しいことでもなかった。だが、いざ実例を前にすると、このうえなく奇妙な感覚だ。

八代は、世の中に腐るほど蔓延している、無責任で怠惰な男たちの一人だった。彼の身勝手な楽しみの中のちに息子 臼井仁は産まれた。

幸代は水商売の女だったのかもしれない。

仁が産まれたのは二十六、七年前、ぬるい規制のなかで、暴力団が幅をきかせていたころだった。八代はただのちんぴらだったか、あるいは、すでに正規の構成員として組に心血を注いでいたか。ちよつとした火遊びのつもりでも、幸代は妊娠してしまった。

幸代は長い時を経て、以前の彼女がそう思っていたように、八代の共犯者ではなくなっていた。伊織がいま、日記を通して見えるのは、己の無知と八代の傲慢さに振り回されたあわれな被害者だった。彼女は、仁が中学に進級するあたりで自殺した。

「仕事先で八代を知った」

「そう 驚かないけど」

いまは仁の仕事先を探っている場合ではない。

「でも俺は、機会があるからつついてみただけで、今回の事件だって、八代が捕まろうが捕まらなからうがどうでもいいんだ」

「義之のことは？」

「警察は予算と、膨大な雑務のおかげで、関わろうとする事件はごく少数になる。一度目を向けた物事は、一市民では及べない次元まで解体できる代わりに。八代がそこから逃げたのは、一市民の追及からも逃れたこととイコールになる。分かるな？」

「分からないわ、あなたの気持ち」

「俺の意見を聞きたいか？ 残念だった。義之のことは、ほんとうに残念だ。彼の無念や、遺族の気持ちを思うといたたまれないよ」

仁は、芝居がかかった溜め息をつく。

伊織は日記帳を閉じた。

「そんなふうにするのはやめて。この偶然に、なにかひとつでも思うことはないの？ あなたのお母さんが生きていたなら、きっと八代を憎んだはずよ」

「八代が捕まれば満足なのか？」

「真実を知りたいだけよ」

「自分にとって都合のいい真実を？」

テーブルの上で、きつく拳を握った。争うべきではないという気持ちだが、余計に苛立ちを増幅させていた。

それで、彼がわずかにたじろぎさえすれば満足だった。だが、彼は至って冷静だった。

「裁判官だって暇じゃないんでな。警察も、検察も、奴のためだけにあるわけじゃない」

「そうしたかったの？」

「なにが？」

「わたしをバカにして、片っ端から否定したかったの？ そのためにも、わざわざここまで出向いてくれたの？」

自分で思ったよりもわずかに感傷的で、悲しみさえ湧き上がっていた。一瞬、仁が動揺を浮かべたが、店の外でクラクションが鳴った。そして、すべてが元に戻った。

伊織は日記に視線を落とした。

「あなたの境遇や、考え方は分かったわ。大した情報はないってことも」

「有意義な話が出来ればよかったんだが」

本心からそう思っているらしく、とげとげしさは感じられない。

仁は立ち上がり（伝票は放置……もちろん）、ひとつ大きく伸びをする。緩慢な動作で、日記を指し示した。

「それやるよ」

伊織の反応が遅れたのは、驚きのせいだった。「いいの？」

「いらなかつたら捨てる」

まったく情熱のかけらもない男だ。店を後にする仁を、物足りな
い思いで見つめながら、情報を整理し、日記帳を鞆におさめた。だ
が、仁という人間は、なんて思いやりにも欠けた身勝手な人間なのだ
ろう。この夜の冷気に、おどろくほど見合った、それでいてなんて
無気力な男。彼に熱をあげていた自分の、なんて愚かで若々しいこ
と。ヒトミにオバサン呼ばわりされたことを思い出し、自分に居た
たまれなくなつたところで、浅倉からの突然の電話に、思考は吹っ
飛んだ。

「ニュースを見た？ 派手にやつたんだな。喧嘩したんだ 八代
が死んだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9435g/>

彼女は闇を引く

2010年10月10日04時11分発行